

対 訳

君が世界を変えていく

The World Is Yours to Change

池田大作

Daisaku Ikeda



朝日出版社

対 訳

君が世界を変えていく

The World Is Yours to Change

池田大作

Daisaku Ikeda

朝日出版社

池田 大作 (いけだ だいさく)

1928年、東京生まれ。創価学会名誉会長、創価学会インタナショナル (SGI) 会長。創価大学、アメリカ創価大学、創価学園、民主音楽協会、東京富士美術館、東洋哲学研究所、戸田記念国際平和研究所などを創立。1960年に創価学会第三代会長に就任。同会の飛躍的かつ国際的な発展をもたらす。これまで世界54か国・地域を訪問。世界の知性との対話を重ね、平和・文化・教育運動を推進する。主な著書に『人間革命』(全12巻)、『新・人間革命』(現10巻)、『私の世界交友録』、『新たなる世紀を拓く』、対談集に『二十一世紀への対話』(A・トインビーとの対談)、『二十一世紀への警鐘』(A・ベッチェイとの対談)、『「生命の世紀」への探求』(L・ポーリングとの対談)、『二十世紀の精神の教訓』(M・ゴルバチョフとの対談) など多数。

対訳 君が世界を変えていく

2002年 1月26日 初版第1刷発行

2011年 2月10日 初版第17刷発行

著 者 池田大作

発 行 者 原 雅久

発 行 所 朝日出版社

東京都千代田区西神田3-3-5

〒101-0065 ☎03-3263-3321

印刷・製本 凸版印刷株式会社

ISBN978-4-255-00140-1 C0095

©Daisaku Ikeda, 2002

Printed in Japan

乱丁、落丁はお取り替えます。無断で複写複製することは著作権の侵害になります。
定価はカバーに表示してあります。

目次

はじめに …2

勇気！『非暴力の勇気』を!! …10

アラビア研究の先覚者 故・川崎寅雄^{とらお}先生 …38

こんな見方^{みかた}があったのか! …74

もう殺戮^{きつりく}はたくさんだ! …104

宗教は平和のためにある!! …146

今なお続く「心の鎖国^{きこく}」 …172

参考文献 …204

初出一覧 …206

Contents

Foreword ...3

The Courage of Nonviolence ...11

A Bridge Between Civilizations ...39

Another Way of Seeing Things ...75

Stop the Killing! ...105

Religion Exists to Realize Peace ...147

Hearts Still Closed to the World? ...173

References ...205

対訳

君が世界を変えていく
The World Is Yours to Change

はじめに

平和を望み、家族の幸福を願い、安全な暮らしを求める——。

それは、世界のいずこであれ、人間が人間として抱く共通の心ではないだろうか。愛する我が子が戦争で「殺される」ことを悲しまない親など、どこにもいない。

にもかかわらず、人間の歴史は、絶えず、醜い争いと不条理な苦しみに喘いできた。血涙に満ちた数千年の教訓を重ねてなお、人類は、その愚かしい「憎悪の連鎖」から逃れることができずにいる。

では、どうすれば、「憎悪」を「共感」へ、「対立」を「共生」へと、転換することが出来るのであろうか。

「一人の人間における偉大な人間革命は、やがて一国の宿命の転換をも成し遂げ、さらに全人類の宿命の転換をも可能にする」——これは、私のライフワークである小説『人間革命』を貫くテーマである。

人間は憎しみ合い、傷つけ合うために生まれてきたのでは、

Foreword

To desire peace, to wish for the happiness of one's family, to seek a secure and safe life—these are the shared sentiments of people everywhere. There is no parent anywhere who does not grieve at the death of a child in war.

And yet, human history has been stained without cease by the horror of war and meaningless suffering. Despite the bitter lessons of millennia of blood and tears, humanity remains unable to free itself from the shackles of folly and hatred.

How, then, can we transform enmity to empathy, conflict to coexistence?

“A great human revolution in the life of a single individual can transform the destiny of an entire society, and can make possible a change in the destiny of all humankind.” This is the theme running through the novel *Ningen kakumei* (The Human Revolution), the writing of which has been a central undertaking of my life.

It is impossible for me to imagine that human beings have been

決^{けつ}してないはずだ。今こそ、人間の無限^{むげん}の可能性^{かのうせい}を信じ、平和^{しん}と創造^{そうぞう}の力を引き出していくときではないだろうか。

戦争^おを起こすのは、人間である。

ゆえに、平和な世界^{そうぞう}を創造できるか否かも、人間自身の手の中にある。

それは、今を生きる一人一人に、なかんずく青年^{みな}の皆さんに、託^{たく}され、委ね^{かだい}られている課題であり、使命といえる。

次代^{にな}を担いゆかれる若き^{わか}皆さんが、この未来^{みな}への挑戦^{ちやうせん}に、雄々^{お お}しく立ち向かっていかれることを、念願^{ねんがん}してやまない。そこにこそ、限りない希望^{かき}の光明^{きこう}を見ている。

その万感^{ばんかん}の期待^こを込めて、私は、「君が世界^かを変えていく」との言葉^{おく}を贈らせていただきたい。

ここに集めたエッセーは、世界の識者^{しきしゃ}との出会いや対話を通して、感じたままの所感^{しょかん}を綴^{つづ}ったものである。

このささやかな一書^{ひと}が、二十一世紀^{ひら}を拓きゆく青年の皆さんの何らかの糧^{かて}になれば、これ以上の喜び^{よろこ}はない。

born into this world in order to hate and harm each other. Now, more than ever, it is crucial that we renew our faith in the infinite potential of humanity and bring forth our capacity to create peace.

War is caused by people. It is therefore up to people whether or not we will create a world of peace. This is the challenge, indeed the mission, that has been entrusted to each individual—each young person, in particular—alive today.

It is a challenge that goes to the very heart of human civilization. And it is my sincere wish that each of you—as young people, as the rising generation—will meet this challenge with great energy and courage. There, indeed, I perceive the light of a limitless hope. It is with this immense sense of hope and expectation that I share with you this thought: The world is yours to change.

The essays in this book record my frank impressions and views through my encounters and dialogues with some of our world's important thinkers. Nothing could bring me greater joy than if this

本書の発刊は、朝日出版社の原雅久社長の方ならぬ御厚意によって、結実したものである。この場をお借りして、原社長をはじめ関係者の方々に心から御礼を申し上げたい。

2002年1月26日

創価学会インタナショナル会長
池田 大作

simple book were to serve as a source of inspiration to the youthful readers who will shape the world of the 21st century.

The publication of this book owes much to the kind support of Mr. Masahisa Hara, president of Asahi Press. I wish to take this opportunity to express my most heartfelt gratitude to Mr. Hara and to all those who have been involved in the realization of this project.

Daisaku Ikeda
President, Soka Gakkai International

January 26, 2002

目次

はじめに …2

勇気！『非暴力の勇気』を!! …10

アラビア研究の先覚者 故・川崎寅雄^{とらお}先生 …38

こんな見方^{みかた}があったのか! …74

もう殺戮^{きつりく}はたくさんだ! …104

宗教は平和のためにある!! …146

今なお続く「心の鎖^{きこく}国」 …172

参考文献 …204

初出一覧 …206

Contents

Foreword ...3

The Courage of Nonviolence ...11

A Bridge Between Civilizations ...39

Another Way of Seeing Things ...75

Stop the Killing! ...105

Religion Exists to Realize Peace ...147

Hearts Still Closed to the World? ...173

References ...205

勇気！『非暴力の勇気』を!!

「人形もチョコレートもありません。ただ平和と自由がほしいのです。ヨーロッパのみなさん、世界のみなさん、人間の心をとりもどして、そしてこの戦争をとめてください」
(旧ユーゴスラビアの少女)

私は、あの日、インドで「ラージ・ガート」に詣でた。

国父マハトマ・ガンジーが茶毘にふされた場所である。

どこかで小鳥が鳴いていた。

緑の森がそばにあった。

茂みの間を、リスたちが駆けまわっていた。

広大な「非暴力の聖地」として整備されているのだ。

記念碑は、大きな黒みかげ石。

献花しながら、私は頭を垂れて、ガンジーの黄金の魂を思った。

世界を焼く「憎しみの大火」を消さんと、「人間愛の清水」

を手に、走り回った人の不屈の闘争を思った。

そして、その人の孤独を思った。

The Courage of Nonviolence

I don't want toys or chocolate. All I want is peace and freedom.
People of Europe, people of the world, please find the humanity in
your hearts to put an end to this war!

—A young girl of the former Yugoslavia

I was visiting Raj Ghat, where Mahatma Gandhi, the father of
Indian independence, had been cremated.

Somewhere a bird sang. A forest was nearby, and squirrels ran
through its lush green thickets.

The area was a spacious, well-tended shrine to nonviolence.

As I offered flowers before the black stone platform that constitutes
Gandhi's memorial, I bowed my head.

I pondered Gandhi's brilliant spirit. I thought of his ceaseless
struggles to douse the fires of hatred with water drawn from the
pure springs of love for humanity.

And I thought of how alone he was in his quest.

「どっちの味方だ！」

「イスラム教徒に報復するなどと！ ガンジーは、あんな奴らの肩をもつのか？ 許せない。俺は家族を殺されたんだ。息子は、まだ五歳だったんだぞ…」

「ヒンドゥー教徒の暴力に耐えよと言うのか？ そんなことができるか。俺たちイスラム教徒が、長いこと、どんな目にあってきたか、知らないのか。やはり、ガンジーだって、ヒンドゥー教徒だからな！」

両教徒が、血で血を洗う紛争を繰り返している地域に飛んで行っては、「殺し合いをやめよ」と叫ぶ、老いた聖者。

しかし、憎悪に狂った人々は、耳を貸さなかった。

「出て行け、ガンジー！ お前の偽善には我慢できない！」

「あんたは、いったい、どっちの味方なんだ！」

ガンジーは、どっちの味方でもなかった。そして、どちらの味方でもあった。人間は、みんな兄弟だ。兄弟が殺し合うのを、どうして黙って見ていられようか……。